

# 神道に現れた民族論理

折口信夫

青空文庫



今日の演題に定めた「神道に現れた民族論理」と云ふ題は、不熟でもあり、亦、抽象的で、私の言はうとする内容を尽してゐないかも知れぬが、私としては、神道の根本に於て、如何なる特異な物の考へ方をしてるかを、検討して見たいと思ふのである。一体、神道の研究については、まだ、一貫した組織が立つてゐない。現に、私の考へ方なども、所謂国学院的で、一般学者の神道観とは、大分肌違ひの所があるが、おなじ国学院の人々の中でも、細部に亘つては、又各多少の相違があつて、突き詰めて行くと、一々違

つた考へ方の上に、立つてゐる事になるのである。

しかし、概して言ふと、今日の神道研究の多くは、善い点ばかりを、断片的に寄せ集めたものである。どうも、此ではいけない。我々現代人の生活が、古代生活に基調を置いてゐるのは、確かな事実であるが、其中での善い点ばかりを抽き出して来て、其だけが、古代の引き継ぎであるとするのは、大きな間違ひであつて、善悪両方面を共に観てこそ、初めて其処に、神道の真の特質が見られよう、と云ふものである。私は、日本人としての優れた生活は、善悪両者の渾融された状態の中から生れて来てゐるのである、と思ふ。

今日でも、沖縄へ行くと、奈良朝以前の上代日本人の生活が、殆

ど如実に見られるが、其処には深い懐しきこそあれ、甚むさくるしい部分もあるのである。若し上代の生活が、こんな物だったとすれば、若い見学旅行の学生などには、余り好ましくない気がして、日本人の古代生活は云々であつた、といふ事を大声で云ふのは氣耻づかしく感ずるであらう、と思ふ程である。しかし、其が真の古代生活であるならば、そして又、今日の生活の由つて来る所を示すものとしたら、研究者としては、耻ぢる事なしに此を調べて、仔細に考へて見る必要があらう。

又近頃は、哲学畑から出た人が、真摯な態度で神道を研究してゐられる事であるが、中にはお木像にもだん服を著せた様な、神道論も見受けられるやうである。此なども甚困つたものである。要

するに、現代の神道研究態度のすべてに通じて欠陥がある、と私は思ふ。

そこで私の意見は、国学院雑誌（昭和二年十一月号の巻頭言）にも述べて置いたが、現代の神道研究に於ては、古代生活の根本基調、此をきいのおとといふか、てえまと云ふか、とにかく、大本の気分を定めるものが把握されてゐないのが、第一の欠点であると思ふ。すべての人は、常に、自分が生活してゐる時代や環境から、其神道説を割り出してゐるが、個性の上に立ち、時代思想の上に立つての神道研究は、質として、余りに果敢ないものである。我々が、正しく神道を見ようとするには、今少し、確かなものを搦んで来なければならぬ。

敢へてこんな事を言ふのは、僭越であるかも知れぬが、とにかく私としては、日本民族の思考の法則が、どんな所から発生し、展開し、変化して、今日に及んだかに注目して、其方向から探りを入れて見たい。いゝ事ばかりを抽象して来て、論じたのでは、結局嘘に帰して了ふ。

神道の美点ばかりを継ぎ合せて、それが真の神道だ、と心得てゐる人たちは、仏教や儒教・道教の如きものは、皆神道の敵だとしてゐるが、段々調べて見ると、神道起原だと思ふ事が、案外にも仏教だつたり、儒教又は道教だつたりする事が、尠くない。こんな事になるのは、つまり日本人の民族的思考の法則が、ほんとうに訣つてゐないからである。日本人の民族文明の基調が、外国人

のものに比べて、どれだけ、特異に定められてゐるかを見ずに、末梢的な事ばかりに注意を払つてゐるから、いけないのである。私は此民族論理の展開して行つた跡を、仔細に辿つて見て、然る後始めて、真の神道研究が行はれるのであると考へる。卒直に云ふならば、神道は今や將に建て直しの時期に、直面してゐるのであるまいか。すつかり今までのものを解体して、地盤から築き直してかゝらねば、最早、行き場がないのではあるまいか。今までの神道説が、単に、かりそめ葺きの小屋の、建てましに過ぎなかつたのではあるまいか。今までの私は、全体的に芸術中心・文学中心の歴史を調べて行かうと志して、進行してゐたのであるが、結局それが、神道史の研究にも合致する事になつた。今日の処で

は、まだく発生点の研究に止まつてゐるが、こゝでは、其一端に就て述べて見たいと思ふ。

## 二

第一にまづ、言ひたいのは、日本の神道家の用語である。祭式上の用語とか、内務省風の用語とかでなく、昔から使はれてゐる神道関係の言葉が、どの位古い所まで突き詰めて研究されてゐるか、此が一番の問題であると思ふ。勿論或点までは、随分先輩の人々も試みられてゐるに違ひないが、それ等は何れも皆、天井でつかへてゐる。譬へば、神道といふ語自身が、何処から来てゐるかす

ら、今までに十分、徹底して調べた人がない。

私は、神道といふ語が世間的に出来たのは、決して、神道の光栄を發揮する所以でないと思ふ。寧ろ、仏家が一種の天部・提婆の道、即ち異端の道として、「法」に対して「道」と名づけたものらしいのである。さうした由緒を持った語である様だ。

日本紀あたりに仏法・神道と対立してゐる場合も、やはり、さうである。大きな教へに対して、其一部に含めて見てよい、従来の国神即ち護法善神の道としての考へである。

だから私は、神道なる語自身に、仏教神道・陰陽師神道・唱門師神道・修驗神道・神事舞太夫・諸国鍵取り衆などの影の、こびりついてゐる事は固より、語原其自身からして、一種の厭ふべき姿

の、宿命的につき纏うてゐるのを耻づるのである。だから、今日の神道の内容を盛る語ではない、と信ずるので、近来、尠くとも私だけは、神道といふ語を使はない事にしてゐる。私は此自説を証明する文献上の拠り処を、今までに可なり多く見たが、若し果して、神道の光榮を表する語である事が、学問的に証明せられるやうならば、いつでも、真に喜び勇んで、元に引き戻す覚悟である。しかし今日の処では、神道それ自身の生んだ、光明に充ちた語である、とは思ふ事が出来ない。

記・紀若しくは、祝詞などを見ると、中には、古語・神語などいふべき古い語が、随分ある。其等の言葉は、不思議にも、大抵此を現代語に書き改めることの出来る程に、研究は積まれてゐるが、

私の経験では、真に其が不思議である。私の今まで最苦しんだのは、祝詞であつた。既に、今までに、半分位、二度までも、口訳文を書き直して見たが、其結果、祝詞の表現法を余程会得した。尠くとも、私自身としては、胸の奥・心の底から感得したと思つてゐる。

私は学校で、万葉の講義をしてゐるが、時々、なぜこんなに、すら／＼と平氣に、講義をすることが出来るか、と不思議に思ふ事がある。先達諸家の恩に感謝する事は勿論であるが、此処に疑ひがある。教へながら、釈きながら居る人の態度として、懷疑的であるといふのは、困つたものであるが、事実、日本の古い言葉・文章の意味といふものは、さう易々と釈けるものではなさうだ。

時代により、又場所によつて、絶えず浮動し、漂流してゐるのである。然るに、昔から其言葉には、一定の伝統的な解釈がついてゐて、後世の人は其に無条件に従うてゐるのである。私は、これ程無意義な事はないと考へる。

其は私が、祝詞に於ける経験及び、古事記或は降つて、源氏物語を現代語に訳し直して、書き改めて見ての、嚴肅な実感であるが、譬へば「天之御蔭・日之御蔭」といふ言葉でも、さうである。恐らく現今では、あの言葉が、常に同じ用語例を守つてゐるものと信じてゐる人は尠いであらうが、尚、少数の守株の敬虔家のあつても考へられる。其外の古い言葉でも、記・紀・祝詞・続紀・風土記の類を通じて、用ゐられてゐる同語にして、同じ用語例

に入れては、解けないものが多く存在する。此は、今日の言葉に就ても、言はれる事であらうと思ふが、其が典型的な語義である、と予断されてゐる以外に、もつと違つた形のある事が、忘れられてゐはすまいか。若しそんな事実がないと思ふならば、其は余りに、前代の学者の解釈にたより過ぎて、当然せねばならぬ研究を、十分にしてゐない為ではあるまいか。此だけは、どなたの前に立つても、私の言ひ得ることあげである。

次田潤さんも、あの「祝詞新講」を公にされるまでには、随分苦しまれたであらうと思ふが、実際に古い言葉を現代語に引き直して見ると、つく／＼困難を感ずる。尤、一通りの解釈は誰にでもつくが、本当に深く考へ出すと、訣らない事が多い。思ふに此

は、口伝への変化したもので、各時代、各個人の解釈で、類型的の意味に於ての語義の、次第に其形が改められて行つた結果であらう。

前に言つた「天之御蔭・日之御蔭」の語でも、家の屋根とも解せられるが、又万葉卷一の人麻呂の詠らしい「藤原宮御井歌」を見ると、天日の影をうつす水とも取れるし、其外尚色々の意味に解ける。かういふ処から考へると、何れも根本から分化して、各違つた用語例を持つ様になつたのであつて、其が大体、後世の合理解を経て——民間語原は固より、学者の研究も——即、最小公倍数式に、帰納して定められたのではあるまいか。万葉などを基礎にして考へると、どうも此語は、時代人によつて、訣らぬまゝに

使はれてゐるらしい。或類型的な祭りとか、其他の類似の行事のときには、かういふ言葉を使はねばならぬものとして、只、無意味に使つてゐるのである。

私の解釈に依ると、この対句は、何れも、高所から垂下してゐる、飾り繩を意味するもので、かげとは、元来、蔓草である。だから其が、宮殿を褒める時の詞とか、新室ほかひの時の詞として、使はれてゐるのである。そこで、此が転じて来ると、宮殿其もの、意味ともなり、又更に転じては、ある解釈に於ける、穆々たる文王といった、ほのぐらい処に奥深くいます、といふ意味にもなるのである。前にも述べた通り、万葉では此が、影うつす水の意味に転じてゐる。

かうなると、語意が浮動して来て、解釈がつかなくなつて来るが、段々研究を推し進めて行つて見ると、此歌は、宮殿の居まはりの山を讃め、水を讃める古い意味の風水——墓相でなく——をうたつた歌であるらしい。此は家を讃める事から来る当然の帰結であつて、家を讃める事は同時に、家主の生命を讃める事であり、又同時に、生命の本源として、魂として、家主の腹中に入る水を褒める事であるからである。高い新築家屋の屋根から、垂下してゐる飾り縄が、水の意味に成つたといふ事も、かういふ風に観て来れば、少しの不思議もないのである。

橘守部の痛快に解釈した「大<sup>オホギミ</sup>王<sup>ミイノチ</sup>の御<sup>ア</sup>寿<sup>マ</sup>は長く天<sup>アマ</sup>た<sup>マ</sup>らしたり」の歌なども「天之御蔭・日之御蔭」といふことが、類型的の表現

になつてゐる為に、其間に、綱の事を云ふのを忘れて了うてゐるのである。そんな事をこくめに云はずとも、漠然たる常套的の感じを誘ふ詞章で、天子の齡を祝福する事が出来るからである。

其外に又、出雲国造神寿詞の「天乃美賀秘」——秘の字は、相変らず疑問——は、頭に冠るかつらの事であつて、此も畢竟、播磨風土記などに見えた、兜の類に言うたかけであるが、普通の天之御蔭・日之御蔭とは、大分用ゐ方が違つてゐる。

とにかく、かういふ風に祝詞を見ると、天之御蔭・日之御蔭といふ事は、色々な場合に使はれてゐるが、其意味は、常に一定してゐないのである。そして、其が殆ど、無理会のまゝに、使はれてゐるのである。

かういふ事を公言するのは、或は敬虔な先達に、礼を失することになるかも知れぬが、私は式の祝詞を、それ程古いものとは思つてゐない。其は言語史の上から立証出来る事である。もつとも尤文中の一部には、かなり古いものを含んだものもあるが、新しいものが多くて、其上に、用語が不統一を極めてゐる。第一義とか、第二義・第三義といふ様な関係ではなく、口の上で固定した、不文の古典の中から、勝手に意味を抜き出して来て、面々の理會に任せて、使つてゐるのである。さすがに、古い神聖な信仰を伝へてゐる個処では、妄りに意味を替へる様な事をしないで、譬ひ意味が訣らずとも、固定のまゝ又は、曲りなりに使つてゐるが、それでも時代が重なると、替らざるを得ない事になる。

譬へば、神典の天孫降臨の章を見ても、記・紀を突き合せて見ると、凡三通りに分れてゐる。まづ古事記を見ると、「於天浮橋、宇岐士摩理、蘇理多多斯弓」とある。随分奇妙な文句であるが、日本紀の方には、これを「則自 日二上天浮橋立於浮渚在平処」となつてをり、更に一書にも、別様に伝へてゐるではないか。此等は何れも、それ／＼の、伝承の価値を重んじて書いたもので、後世の理會では、妄りに動かす事が出来ないから、記録当時までの元の姿で置かれてゐたのである。

ところが、実用語となると、そんな訣にはいかない。新しい意味が加はると、段々其方に移つて行くから、何処までが、果して根本の語義に叶うてゐるのか、訣らなくなつて了ふ。今日伝はつて

るる解釈は、畢竟誰かゞ、いゝ加減な所で、合理的に解釈して出来たのではあるまいか、と思ふ。

とにかく、古い言葉を仔細に研究して見ると、今までの伝統の解釈は、殆ど唯、碁盤の上の捨て石の様な、見当定め役の外、何にもなつてゐない事が多い。随つて、そんなものを深く信じ、基準にして、昔の文章を解く事は出来ないと思ふ。

### 三

日本人の物の考へ方が、永久性を持つ様になつたのは、勿論、文章が出来てからであるが、今日の処で、最古の文章だ、と思はれ

るのは、祝詞の型をつくつた、祝詞であつて、其が、日本人の思考の法則を、種々に展開させて来てゐるのである。私は此意味で、凡日本民族の古代生活を知らうと思ふ者は、文芸家でも、宗教家でも、又倫理学者・歴史家でも皆、祝詞の研究から出発せねばならぬ、と思ふ。

処が、其祝詞の後なる祝詞なるものさへ、前にも云つた如く、今日の頭脳では、甚難解なことが多い。鈴木重胤などは、ある点では、国学者中最大の人の感さへある人で、尊敬せずには居られぬ立派な学者であるが、それでも、惜しい事には、前人の意見を覆しきれないで、僅かに部分的の改造に止めた様であつた。そこで、訣らぬ事が沢山に出て来る。

まづ祝詞の中で、根本的に日本人の思想を左右してゐる事實は、みこともちの思想である。みこともちとは、お言葉を傳達するものゝ意味であるが、其お言葉とは、畢竟、初めて其宣を發した神のお言葉、即「神言」で、神言の傳達者、即みこともちなのである。祝詞を唱へる人自身の言葉其ものが、決してみことではないのである。みこともちは、後世に「宰」などの字を以て表されてゐるが、太夫をみこともちと訓む例もある。何れにしても、みこととを持ち伝へる役の謂であるが、太夫の方は稍低級なみこともちである。此に対して、最高位のみみこともちは、天皇陛下であらせられる。即、天皇陛下は、天神のみみこともちでお出であそばすのである。だから、天皇陛下のお言葉をも、みことと稱したのであ

るが、後世それが分裂して、天皇陛下の御代りとしてのみことも  
ちが出来た。それが中臣氏である。

古語拾遺は、其成立の本旨から見ても知れる如く、齋部広成が、  
やつきとなつて、中臣・齋部の同格説を唱へてゐるが、私は元来、  
あの古語拾遺に余り重きを置いてゐない。古い事を研究するのは、  
あまり大切なものとは思へぬ。尠くとも、私の研究態度には、  
足手纏ひにこそなれ、あまり役立つて来てゐない事を告白する。

私は、あの中には、確に、後世的の合理説が這入つてゐる、と思  
ふ部分が多いのであるが、そんな事は第二として、抑、そもそも中臣氏と

齋部氏との社会的位置が同じであつた、といふ事からして、誤り  
である。齋部氏は最初から、決してみこもちではなかつたので

ある。謂はゞ、山祇のみこともちといふ事になりさうに思ふ。こ  
とほぎの基礎になるいはひごとを、伝誦する部曲及び伴造であつ  
たので、天子の代宣者とは言へないのである。古典研究者の資料  
鑑別眼が、幾ら進んでも、心理的観入の欠けた研究態度を以て、  
科学とする間は駄目だ、と思ふ。さういふ訣で、天子のみことも  
ちは、中臣氏である。だが、此は、根本に於ての話である。

広い意味に於ては、外部に対して、みことを発表伝達する人は、  
皆みこともちである。諸国へ分遣されて、地方行政を預る帥・国  
司もみこともちなれば、其下役の人たちも亦、みこともちとして、  
優遇せられた。又、男のみこともちに対して、別に、女のみことも  
ちもある。かういふ風に、最高至上のみこともちは、天皇陛下

御自身であらせられるが、其が段々分裂すると、幾多の小さいみこともちが、順々下りに出来て来るのである。

此みこともちに通有の、注意すべき特質は、如何なる小さなみこともちでも、最初に其みことを発したものと、尠くとも、同一の資格を有すると言ふ事である。其は、唱へ言自体の持つ威力であつて、唱へ言を宣り伝へてゐる瞬間だけは、其唱へ言を初めて言ひ出した神と、全く同じ神になつて了ふのである。だから、神言を伝へさせ給ふ天皇陛下が、神であらせられるのは勿論のこと、更に、其勅を奉じて伝達する中臣、その他の上達部——上達部は元来、神※部カムタチであつて、神※に詰めてゐる団体人の意である——は、何れも皆、みこともちたる事によつて、天皇陛下どころか直

ちに、神の威力を享けるのである。つまり、段々上りに、上級のものと同格になるのである。

此關係は、ずつと後世にまで、伝はり残つてゐる。譬へば、寺々に附属してゐる唱門師がさうである。あれは元來、声聞身と呼ぶ、低い寺奴の階級であるが、諸方を唱へ言して歩いた。後には、陰陽道に入つて、陰陽師となつたものも多い。処が、此等の唱門師は、面白い事に、大抵藤原氏を名告つてゐる。此は、唱へ言を唱へることによつて、藤原氏と同格になる事を意味するのである。

——此は、中臣になれない事情があるからの事で、又禁ぜられてもゐたのらしい——我々は時々、交通の不便な山間の僻村に、源氏又は平家・藤原の落人の子孫と称する人々の、部落を作つてゐ

ることを見聞きするが、中には、一村皆藤原氏からなつてゐる、所謂落人村がある。ちよつと聞いたのでは、理由が判らぬが、実は皆、唱門師の住みついた空閑の新地である。祓へ言を唱へたからの名である。又蛇を退散させる呪文などに、「藤原々々ふぢはらや」などいふ句のあるのも、やはり、此唱門師の、藤原から来てゐるのである。

さういふ風に、本来のみことを発した人と、此を唱へる者とが、一時的に同資格に置かれるといふ思想は、後になると、いつまでも、其資格が永続するといふ処まで発展して来た。天皇陛下が同時に、天つ神である、といふ觀念は、其処から出發してゐるのであつて、其がかむながら惟神の根本の意味である。惟神とは「神それ自

身」の意であつて、天皇陛下が唱へ言を遊ばされる為に、神格即  
 惟神の現アキつ御神ミカミの御資格を得させられるのである。此惟神の觀念  
 は、中臣その他のみこともちの上にも移して、考へる事が出来る  
 のであつて、随つて、もつぱら専朝廷の神事を掌つた中臣が、優勢を占め  
 るに至つたのは、固より当然の事である。

#### 四

此中臣氏が、宮廷に於ける男性のみこともちであつたのに対して、  
 別に又、宮廷の婦人にも、一種のみこともちらしいものがある。  
 推察するところ、此等の婦人たちは、口でみことを伝へたであら

うと思はれるが、其が後に、文書の形に書き取られる様になつたのが、所謂、内侍宣・女房宣であらう。後期王朝になると、かういふ婦人たちを、みこともちとしての資格を持つてゐるもの、と考へてはゐなかつたらしいが、江家次第の類を見ると、まだ中臣女・物部女などの記載があつて、殊に、中臣女が屢、目に著く。此記録の書かれた時分には、既に固定して、無意味となつて了うてゐるが、これは元来、天皇陛下の御禊に陪して、種々のお手助けをする女である。

そこで、考へに上るのは、古い時代の后妃には、水神の女子が多い事である。私は近頃、水神及び、水神の巫女なる「水の女」の事を考へてゐるが、不思議にも、天孫降臨の最初のお后このはな

のさくや媛だけは、おほやまつみの娘であるけれど、其以後の後妃は、垂仁帝あたりまで、大抵、水神の娘である。さうして、さくや媛すら「水の女」の要素を十分に持つてゐられた事が窺へるのである。要するに、出雲系の神は皆「水の神」又は「水の女」で、試みに、すさのを・おほくにぬしの系統を辿つて行くと、大抵水神であることを発見する。とにかく、代々の后妃に出雲系、随つて、水神系の多い事は、事実であつて、此で見ると、代々の妃嬪は古く皆、水神の娘の資格で、宮廷に上られ、更に、出雲系の女の形式を以て、仕へ始められたものといふ事が、出来さうなのである。

此に關聯して、一つ不思議なことがある。それは垂仁の卷に、后

さほ媛が、兄と共に、稻城の中で焼け死なうとされた時に、天皇が使ひを遣して、「汝の堅めし美豆ミツ乃小佩ヲヒモは誰かも解かむ」と問はしめ給ふと、さほ媛は美智ミチ能宇斯ウシ王ノの女の兄毘売・弟毘売をお使ひになつたらよからう、と奉答されてゐる一事である。此は、従来の解釈では、后となるのだから、小佩を解くのである、といふ風に解せられてゐるが、其考へは逆であつて、小佩を解くから、后になるのである。小佩を解くのは、禊に随伴する必須の条件であつて、禊と小佩を結び堅める役目と、妃であるといふ事とは、何処までも循環的の関係である。而も、第一には、水中から現れて、天子の物忌みの小佩を解く役の人である。

## 五

此みこともちの思想が變形すると、今度は「申」更に簡單になると「預」になる。「申」となると、みこともちよりは、少し意味が広くなつて、撰政の如きものも「政申すつかさ」である。此「申す」といふのは、やはり唱へ言をする事で、古くは、下から上への、奏上する形式である。謂はゞ「覆奏」が原義に近いのであつた。後に譬ひ、唱へ事は云はないとしても、やはり其処から、出立して来てゐるのである。

そこで「祭」といふ事と「政」との區別は、既に、先師三矢重松

先生が殆ど完全な処まで解釈をつけられたが、幾らかまだ、言ひ残された所があると思ふ。此區別を知るには、天皇陛下の食国の政といふ事の、正しい意義を調べるのが、一番の為事であるが、今日では「食す」を「食ふ」の敬語であると見て、食国とは、天皇の召し上り物を出す国、と固定してしか解せられぬが、昔はもつと、自由であつたであらう。併し、食国の政に於ての、最大切な為事は何であるか、と云へば、其は、天つ神から授けられた呪詞を仰せられる事である。まつりの「まつ」といふ事に就ては、安藤正次さんの研究があるが、此にもまだ、其先がある。まつりの語源を「またす」に求めて、またすは「祭り出す」の略とするのもよいが、完全ではない。またすは、用事に遣ること、即「遣

使」の意で、まつるは、命ぜられた事を行ふ意である。端的に云へば、唱へ言をする事である。神功皇后の御歌に、

この御酒ミキは、我が御酒ならず。くしの神 常世にいます、いはたゝす すくな御神ミカミの、豊ほき、ほきもとほし、神ほきほきくるほし、まつりこし御酒ぞ（仲哀天皇紀）

とある其まつると転じたのだ。まつるが奉るであるといふ事は、既に旧師自身、其処まで解釈をつけてゐられる。つまり、天神の仰せ言を受けて、唱へ言をせられる其行事及び、其唱へ言をしての収獲を神に見せるまでが、所謂祭事であつて、其唱へ言の部分が祭りである、と見れば、食国の政といふ事が、よく訣るのである。即、言ひ換へれば、みこともちをして来た、其言葉を唱へる

のがまつりで、其結果を述べる再度の儀式にも、拡張したものだ。其が中心になつてゐる行事が、祭り事なのである。やまとたけるの尊の東国へ赴かれた時の「まつりごと」の意味も、此で立派に訣ると思ふ。

ところが、後には、其祭事が段々政務化して来て、神に生産品を捧げる祭りと離れて、唱へ言を省く様になつた。併し、根本は殆ど変らないのであつて、こゝまで来ればみこもちの思想は、まだく展開して行つて、此が逆に、隠居権や下剋上の氣質を生んだのだ。

次には、少し方向を変へて見たい。

みこもちをする人が、其言葉を唱へると、最初に其みこことを発

した神と同格になる、と云ふ事を前に云つたが、更に又、其詞を唱へると、時間に於て、最初其が唱へられた時とおなじ「時」となり、空間に於て、最初其が唱へられた処とおなじ「場処」となるのである。つまり、祝詞の神が祝詞を宣べたのは、特に或時・或場処の為に、宣べたものとみられてゐるが、其と別の時・別の場処にてすらも、一たび其祝詞を唱へれば、其処が又直ちに、祝詞の発せられた時及び場処と、おなじ時・処となつるのである。私は、かういふ風に解釈せねば、神道の上の信仰や、民間伝承の古風は訣らぬと思ふ。

さすがに鈴木重胤翁は、早くから幾分此点に注意を払つてゐる。私が、神道学者の意義に於ける国学者の第一位に置きたいのは、

此為である。大和といふ国名が、日本全体を意味する所まで、拡がった事なども、此意味から、解釈がつきはすまいか。「大倭根子天皇」といふのは、万代不易の御名で、元朝の勅にも、即位式の詔にも、皆此言葉が使はれてゐたが、此は云ふ迄もなく、やまとの国の、最高の神人の意味である。山城根子・浪速根子・大田々根子等の根子と一つである。そして、其範圍の及ぶ所は、最初に大和一国内であつたのが、後には段々拡がったので、大和朝廷の支配下であるから、日本全国が「やまと」と呼ばれたのではなく、大日本根子天皇としての祝詞の信仰の上から、来てゐるのである。だから、山城に都が遷つても、大和の祝詞を唱へたのであつて、其証拠は、京都近郊の御料地の神を祭る時の祝詞に、大和

の六つの御県の、神名の出て来る事でも明らかである。

尚又、其に關聯して起るのは、地名が轉移する事である。全国の地名には、平凡に近い程までに、同名が多くある。が尠くとも、其第一原因は、皆祝詞がさうさせたのである。藤原・飛鳥などは、その顕著な一例であらう。その外、葦原中国は、九州にもあり、その他、方々にあるが、此は葦原中国の祝詞を唱へれば、即そこが、葦原中国になるのであるから、少しも不思議はない。察する所、昔はもつと自由に、地名が移動したのであつて、譬へば、天孫降臨を伝へる叙事詩を諷<sup>うた</sup>へば、直ちに其処が、日向の地になつたであらうと思ふ。此は、昔の人の思考の法則から見て、極めて自然な事である。だから、時間なんかは勿論、いつでも超越して

ゐた。譬へば、神武天皇も、崇神天皇も、共に「肇<sup>ハツクニ</sup>国しろす天皇」である。私は少年時代に、此事を合理的に考へて見て、どうも、命の革る国の倂を仄かに映し見てゐたのだが、此も肇国の唱へ言があつて、その祝詞を唱へられたお方は、皆肇国しろす天皇なのであつた。其が其中でも、特に印象の深いお方だけの、固有名詞のやうになつて残るに至つたのである。

又、続紀を見ると、「すめらが御代々々中今」といふ風な発想語が見えてゐる。此は、今が一番中心の時だと云ふ意味である。即、今の此時間が、一番のほんとうの時間だ、と思つてゐるのである。一方では「皇が御代々々」といふ長い時間を考へながら、しかも呪詞の力で、其長い時間の中でも、今が最ほんとうの時間になる、

と信じたのである。

天が下といふ事でも、古くは天皇陛下の在らせられる処は、高天が原の真下に当る、といふ考へから出た語である。つまり、天と地と直通してゐる皇居だけが、天が下であつた。そして此も皆、祝詞の力が、さうさせるのであつた。

更に今一層、不思議な事は、「商返」の觀念である。此は、万葉の歌の中に出て来る事で、普通には「あきかへし」と訓まれてゐるが、又「あきかはり」とも訓まれる。

アキカヘシ  
商 変

、しろすとのみのりあらばこそ、我が下ごろも、か

へし賜タバらめ（万葉集卷十六）

といふのが其歌で、此意味は古来明瞭にわかつてゐる。此「商変」

といふのは、貸借行為の解放であつて、一たび其詔勅が下れば、一切の債権・債務が帳消しとなるのである。そこで、其關係を男女の關係に当てはめて、軽い皮肉を云つたのが此歌である。こゝに「みのり」とあるのは、朝廷からの命令の事で、憲法を「みのり」と訓むのと、意味に於ておなじことであるが、畢竟此も祝詞であつたのが原形だと見てよい。

商變のみのりの思想は、察するところ、春の初めに、天皇陛下が高御座に上つて、初春の頌詞を宣らせられると、又、天地が新になるといふ思想から、出てゐるのであらう。後には此宮廷行事が、御即位の時だけしかなくなつたが、高御座は、天皇陛下が、天神とおなじ資格になられる場所である。一たび其処へお登りになれ

ば、その宣らせ給ふお言葉は、直ちに、天神自身の言葉である。そして其お言葉が宣られることに依つて、すつかり、時間が元へ復るのである。商變のみのりの効力は、畢竟、此と同一觀念に基くものである。民間に關した記録が尠い為に、後世、室町時代に現れた徳政の施行が、物珍らしい事のように、一部では見られてゐるが、祝詞に対する信仰から云へば、此は当然の形であつて、我が国には古くからあつた事なのである。かういふ風に、祝詞の力一つで、時間も元へ戻るし、又場所も、自由に移動する。即、時間も空間も、祝詞一つで、どうにでもなるのである。

我が国には古く、コトダマ言靈の信仰があるが、従来の解釈の様に、断

篇的の言葉に言霊が存在する、と見るのは後世的であつて、古くは、言霊を以て、呪詞の中に潜在する精霊である、と解したのである。併し、それとても、太古からあつた信仰ではない。それよりも前に、祝詞には、其言葉を最初に発した、神の力が宿つてゐて、其言葉を唱へる人は、直ちに其神に成る、といふ信仰のあつた為に、祝詞が神聖視されたのである。そして後世には、其事が忘れられて了うた為に、祝詞には言霊が潜在する、と思ふに至つたのである。だから、言霊と言ふ語の解釈も、比較的、新しい時代の用語例に、あてはまるに過ぎないものだ、と云はねばならぬ。世間、学者の説く所は、先の先があるもので、かう言ふ信仰行事が、演劇・舞踊・声楽化して出来たのが、日本演芸である。

だから日本の芸術には、極端に昔を残してゐる。徳川時代になつても、その改められた所は、ほんの局部に過ぎない。そして注意して見ると、到る所に、祝詞の信仰が澱み残つてゐる。

譬へば、此は、圧迫の烈しかつた為でもあるが、文芸作品の上に見れて来る其時代の出来事は、時代も場所も、現実のものとは変更されてゐる。浄瑠璃を見ても、戯作を見てもさうだ。大阪陣や関ヶ原の役の敵身方は、何れも鎌倉方・京方になつてゐる。歌舞妓芝居は固より、洒落本類や粹書本などにも、其影響が見られる。即、其等の本では、江戸の事を鎌倉へ持つて行つてゐる。稲瀬川三囲の段だの、何が谷ヤッなどいふ地名を、江戸の町名の替りにした様な例もあれば、又富ヶ岡八幡を、鶴ヶ岡めかしたやうな記載も

見られる。

かういふ風に、時間や空間が、徳川文芸の上で無視せられてゐるのは、前にも述べた通り、確かに、幕府の圧迫に原因してゐる、といつてよいが、特にかういふ遁げ路を取つたのには、理由がなくてはならぬ。私は此を以て、祝詞の信仰が、日本人の頭脳に根深く這入つてゐる結果である、と見るのであつて、よし個々の作者には其処までの確かな意識がないとしても、全体として、其処に源を発してゐる事は、争はれないと思ふ。

次に又、みこともちの思想である。此は、言ひかへれば、不老不死といふ意味で、祝詞信仰と密接の関係がある。いつでも、元始ハジメに戻る唱へ言をするから、其度毎に、新しい人になつて、永久不

滅の命を得るのである。武内宿禰が、三百余歳の寿を保つたといふのも、其である。而も此人は、本宜歌ホキの由来を繋けられてゐる。長生するのも、尤である。其外、民間の伝承では、倭媛命・八百比丘尼・常陸坊海尊などが、何れも皆長生してゐる、とせられてゐる。此も唱へ言と、關聯してゐるのである。

此等の物語では、昔語りをする人は、同時に昔生きて居た人である、といふ事になつてゐるが、後には、其物語の主人公の側近くゐた人だ、といふ事になつて來てゐる。譬へば、義経に対して常陸坊海尊、曾我兄弟に対して虎御前などは、此類である。併し、あの虎御前といふのは、実は物語中の人物ではなく、虎ゴごぜといふ人が曾我の事を語りあるいた事を意味するのである。虎ゴごぜの

「いぜ」は、瞽女のごぜと同じである。虎といふ名の盲御前である。其が白拍子風の歌を、鼓を打つて語つたのが、段々成長して、遂に、あの一編の曾我物語を成したのである。三州長篠のおとら狐や、讃岐の屋島狸が、長篠合戦や、源平合戦の話をするのも、此類である。不思議にも、長篠には浄瑠璃姫の蹟が残つてゐる。有名な屋島狸も、やはり此亜流で、すべてかういふ風に、旧事を物語る人は、必不老不死である、と信ぜられてゐたのである。そして同時に、何処までも遠く遍歴し、謳ひゝろめて歩いてゐた事を示してゐる。

此事を証拠立てる近世の著しい例は、歌念仏を語りあるく念仏比丘尼で、此比丘尼の事は、浄瑠璃にも残つてゐる。殊に、懺悔物

語をする比丘尼に於て著しい。若狭の八百比丘尼も、恐らく、其一種の古いものであらうと思ふ。それに、的確に中る例は、近松の「五十年忌歌念仏」である。あれを見ると、清十郎が殺されてから、清十郎の妹と許嫁の女とが、共に歌比丘尼として、廻国の旅に出ることになつてゐるが、此戯曲の根本を考へると、最初は、歌比丘尼の歌が、本もとになつて出来たもので、其前には「五人女」のお夏があり、更に其前に、歌祭文の材料になつたお夏があつたのである。西沢一風といふ人が、姫路に行つて、老後のお夏に逢つて、幻滅を感じたといふ有名な話は、多分ほんとうであらうが、とにかく、念仏の上の主人物を謡ひてにうつした形である。お夏の事を語り歩いた、念仏比丘尼の一類があつたのは事実で、日本

式の推理法に従ふと、其がお夏だといふ事になるのである。真のお夏ではなくとも、其懺悔を語るのは、お夏の資格に於てするのである。此が、昔から語り物を語る根本の資格で、お夏の話も、元は尠くとも、お夏といふ念仏比丘尼の、語りあるいた物語であつた事が訣る。それでなければ、お夏が比丘尼になつた訣がわからない。

ともかく、念仏比丘尼即、熊野比丘尼は、虎御前型である。恐らく、虎御前と云ふ名で総称せられるべき瞽巫女も、其出身は、熊野にあるのではあるまいか。伝ふる所に依ると、あの物語は、箱根権現の信仰から生れたのであるといふから、最初に熊野の信仰を、何人かゞ箱根に移して来て、其を伊豆山と関聯させて、こゝ

に東西に、二つの熊野が出来たものであらう。相摸の二所権現は、熊野から来てゐるもので、其処を根拠とする、一種の熊野比丘尼の分類が、曾我物語を生み出したのである。其等は皆虎こごぜと同じく、熊野系統と見られるものである。ところが、此熊野比丘尼は、注意して調べて見ると、何寿といふ名の者が多い。譬へば、清寿の如きは其である。此は、観音信仰から出てゐるのであらうと思はれるが、お夏清十郎の清十郎といふ名前も、当然或聯想を従へて来る。

かういふ風に、祝詞を宣る人とか、或は昔物語を語る人には、一種の不老不死性が、信仰的に認められてゐるのである。天子には人間的な死がなく、出雲国造にも同様、死がない。此は、当代の

国造が死んでも、直ちにおなじ資格で、次の国造が替り立つからであつて、後世の理会の加はつて後にも、国造家では、当主が死んでも、喪に服せない慣習であつた。宮廷に喪があるのは、日のみ子たる資格を完全に、獲得する間の長期の御物忌みを、合理的に解釈したのであつた。支那の礼式に合せ過ぎたのである。

それから今一つ、みこともちの事に關聯して注意したいのは、わが国では、女神の主神となつてゐる神社の、かなり多い事である。此は多く巫女神で、ほんとうの神は、其蔭に隠れてゐるのである。此女神主体の神社は、今日でも尚多く残存してゐるが、最初は神に奉仕する高級巫女が、後には、神の資格を得て了うたのである。彼女等はその職掌上、殊に人間と隔離した生活をしてゐるから、

ほんとうの神になつて了ふのである。宮廷では中ナカ天ツメ皇ラミ——  
ミコト

又は中皇命——が、それに当らせられる。此は主として、皇后陛下の事を申したらしく、後には、それから中宮・中宮院などといふ称呼を生んで来てゐる。平安朝の中宮も、それであらう。中といふのは、中間の意味で、天子と神との間にゐる、尊い方だからである。我々は、普通に此を天皇陛下の方へ引き附けて、神とは離して考へてゐるが、天子が在らせられない場合には、その中、天皇が女帝とおなじ意味に居させられる。神功皇后・持統天皇などは、其適例である。つまり、次代の天皇たる資格のお方が出直されるまで、仮りに帝座に即いて、待つてゐられるのである。現に清寧天皇などは、ほとんど殆待ちくたぶれておいでになつた様な有様で

ある。

此事を日本人の古い考へ方で云ふと、此等の中天皇は、神の唱へ言を受け継がれる為に、ある時期だけ、神とされるのであるが、後には此に、別種の信仰即、魂の信仰が結びついて、唱へ言をすると、神の魂がついて来る、といふ觀念が生れた。神前に供へた食物を喰べても、ついて来るものと信じてゐた。

昔、わが国では、たまふりといふ事が行はれたが、其原意はやはり、魂を固著させる事である。其が後には、鎮魂即、たましづめといふ様な思想に変化するが、其までの間に、魂がふゆ、魂をふやすなどの思想が、存在したのであつて、恩賚即、奈良朝前後の「みたまのふゆ」など、いふ言葉も、其処から生れて来てゐるの

である。

かういふ意味で、神に食物又は、類似の物を捧げるといふことは、相互の魂の交換を図る為である。出雲国造神賀詞なども、其氏の人々が、服従を誓ふ為に、唱へ言をすると同時に、其魂が先方へ附くのであるが、其だけでは物足りないので、魂は其食物につく、といふ古い信仰に随つて、食物を捧げ、氏々の祝詞を唱へて、魂を呼ぶ事になつた。鏡餅・水・桑・醴・握り飯など、様々の供物を捧げる根原は、こゝにある。つまり両方面を兼ねて、魂を捧げる、といふ事になつたのである。

だから、唱へ言は、其唱へられる人々からは、寿詞即、齡に関する詞であると同時に、此を唱へる人から見れば、服従の誓詞であ

る。即、守護の魂を捧げて仕へてゐる人の健康を増進せんとすること、其が服従の最上の手段である。後には、其服従を誓ふ詞の表現に、種々の特別な修辭法を用ゐる事になり、譬喩的な誓ひの文句を入れる事になつたが、古い誓ひでは、壽詞を唱へる事が即、誓ひであつて、同時に其が受者から見れば、壽詞であつたのである。

かういふわけで、我が国の古代に於ては、ヨゴト壽詞を唱へて、服従を誓ふ事は、即其魂を捧げる事であつたが、此魂と、神との區別は、夙くから混同せられて了うてゐる。にぎはやひの命は物部氏の祖神と考へられてゐるが、実は、大和を領有する人に附くべき靈魂である。此大きな靈が附かねば、大和は領有出来なかつたのであ

る。だから、神武天皇も、此にぎはやひの命と提携されてから、始めてながすね彦をお滅し遊されたのであつた。石上の鎮魂法が重んじられたのも、此事実から出てゐる訣であつたのだ。かやうに、下の者から上の者に、守護の魂を捧げると、其に対して、交換的に、上の人から下の者に魂を与へられる。神に祈ると、神の魂が分割されて、その祈願者にくつゝいて働きを起す。後期王朝から見える、冬の衣配り行事は、其遺習であつて、つまり、魂を衣につけて分配するのである。

## 六

以上述べたやうに、日本人は一つの行為によつて、其に關聯した幾多の事實を同時に行ひ、考へる、といふ風がある。即、家のほかひをする事は、同時に主人の齡をことほぐ事であり、同時に又、土地の魂を鎮める所以でもある。かういふ關係から、日本の昔の文章には、一篇の文章の中に、同時に三つも四つもの意味が、兼ねて表現されてゐる。ちよつと見ると、ある一つの事を表現してゐる様でも、其論理をたぐつて行くと、譬喩的に幾つもの表現が、連続して表されてゐる事を発見する。しかも、作者としては、さうした多数の発想を同時に、且直接にしてゐるのであつて、其間に主属の關係を認めてゐない。此が抑、八心思兼神の現れる理由である。思兼神とは沢山の心を兼ねて、思ふ心を完全に表現する、

祝詞を案出する神である。つまり、祝詞の神の純化したものである。かういふ風に、日本の古い文章では、表現は一つであつても、其表現の目的及び効力は複数的で、同時に全体的なのである。処が、わが古典を基礎にした研究者なる、神道家の大部分又は、其西洋式の組織を借りこんで来た神道哲学者流には、其点が訣つてゐない。そして、其が訣らないから、古代人の内生活は、極めて安易に、常識的にしか、理解せられて来ないのである。見かけは頗単純な様でも、其効力は、四方八方に及ぶのが、呪詞すこぶる発想法の特色であつて、此意味に於て、私は祝詞ほど、暗示の豊かな文章はないと思ふ。

次に此「のりと」といふ語の語義は、昔から色々に解説せられて

るが、のりととは、初春に當つて、天皇陛下が宣<sup>ノリト</sup>処即、高御座に登られて、予め祝福の詞を宣り給ふ、其場所のことである。つまり、のりと屋・のりと座の意味である。天皇陛下が神の唱へ言をされて、大倭根子天皇の資格を得させ給ふ場所が、即「のりと」である。そして其場合に、天皇陛下の宣らせ給ふ仰せ詞が「のりとごと」である。最初には、予めの祝福、即「ことほぎ」であつたが、次第に其が分化して、後には讚美の意味にもなり、感謝の意味にも転じた。

<sup>サカホカヒ</sup>  
 酒 樂

なども、最初は、酒を醸す時の祝福の詞及び、其に伴ふ舞踊であつたのであるが、後には、其醸された酒を飲む事までも云ふ様になつた。そこで最初は、良い酒が出来るやうに、と祝福

する詞が同時に、飲用者の健康を祝福する意味を兼ねる事にもなり、更に転じては又、旅から戻つた者の疲労を癒し、又病気の治療を目的として、酒を飲むといふ事にもなつた。つまり此も、論理の堂々廻りである。かういふ風で祝詞には、祝福の意味と共に、感謝と讚美との意味が、常に伴うてゐるのである。

かくの如く、昔の日本人が、すべての事を聯想的に見た事は、又、譬喩的に物を見させる事でもあつた。「天の御柱をみたて」といふ事などは、私は、現実に柱を建てたのではなく、あるものを柱と見立て、祝福したのであると見たい。淡島を腹として国生みをする、といふ事も、昔から難解の句とせられてゐて、或学者は、此を「長男として」の義に解したが、誤りである。国を生む

には、生むべき腹がなければならぬ。そこで、其腹を淡島に見立てられて、国を生ませられたのである。即、此も一種の「見立て」思想なのである。

この「見立て」の考へは、祝詞の考へ・新室のほかひの考へ・大殿ほかひの考へと、互ひに聯関してゐるものであつて、殊に其中心勢力になつてゐるものは、祝詞であるから、祝詞の研究を十分にしたならば、今まで解けなかつた、神道関係の不可解な事も、存外、明らかに釈けて来さうに思ふ。





# 青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

初出：「神道学雑誌 第五号」

1928（昭和3）年10月

※「講演筆記」の記載が底本題名下にあり。

※底本の題名の下に書かれている「講演筆記。昭和三年十月「神道学雑誌」第五号」はファイル末の「初出」欄、注記欄に移しました。

※底本では「訓点送り仮名」と注記されている文字は本文中に小

書き右寄せになっています。

入力：高柳典子

校正：多羅尾伴内

2007年7月13日作成

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 神道に現れた民族論理

折口信夫

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>